

# 北欧神話とサガの 世界への招待



サガエツダ協会

オフライン版発行のごあいさつ

サガ・エッダ協会 総裁 ヘルギみのまた

本書をお手に取られましたみなさま、はじめまして。私たちサガ・エッダ協会は、古代および中世北欧文学を愛好する有志によって結成され、インターネット上にて活動している、非営利のサークル活動団体です。先に紹介がありましたとおり、最初はお互いの顔を知らない、同じ趣味というだけの共通点を持つ人々が集まり、掲示板やチャットでの議論、そしてオフ会で実際に顔を合わせての議論を経て、今に至ります。

このような経緯から、これまで親睦目的であるオフ会以外のすべての活動を、インターネットのウェブ上にて展開してきました。それは、訪問される方々から寄せられる情報をもとにしてサガやエッダの文献リストを作成したり、あるいはリンク集を作成し、またある時は投稿企画と称して外部の方々にもご参加いただけるような企画といったものです。それらはすべてサガ・エッダ協会の、

「古代・中世北欧文学を愛好する方々をつなぐ組織として、相互交流の機会を設けることに全力を尽くす」とも

に、誰でも無料で利用できるウェブサイトを通じて情報の収集・整理・発信を積極的に行い、利用される方々に還元できるような環境を作ることに努めてまいります。」

という運営方針をもとに行われています。

そうした中運営メンバーより、「インターネットのウェブ上のみならずもっと多くの人々の目に触れる機会はないものか」という意見が出て、協会内のメンバーでオフ会を含めて連日議論を重ねた結果、今回は同人誌即売会にお越しになるみなさまをターゲットにした、サガ・エッダ協会を紹介するオフライン版のパンフレットを作成することとなり、有志で原稿を執筆しました。

私たちは学者の集まりではなく、また、古代および中世北欧文学を愛好する人々の集まりとは言ってもまだまだ新参者であり、ノウハウも少なく何かと至らない点もあるかと思いますが、今後ともみなさまのご指導のほど宜しくお願い申し上げます。

# 北欧神話とサガの世界への招待

オフライン版発行のごあいさつ ヘルギ みのまた

## 目次

バイキングの生活と神話 柿田

北欧神話とサガの世界への招待 岡沢 秋

サガにおける女性の法的権利について 山森 衛

いまだきのヴァルキューレ ヘルギ みのまた

サガエツダ協会について 岡沢 秋

..... 3

..... 5

..... 15

..... 16

..... 21

..... 24

## バイキングの生活と神話

北欧神話を信仰していた民族バイキングの生活や神話について紹介する。

### はじめに

バイキング形式の料理は今でも人気がある。好きな物を好きな量だけ食べれる形式が魅力的であり、大食いの人や食い溜めが好きなく人にとっては恩典であろう。レストランやホテルでも、非常にポピュラーな形式である。泊まったホテルの食事でバイキングがあると、私は思わず胸を弾ましてしまう。好物がたくさん出たら、「これが食べ放題か。ジャンジャン食うぞ。」と気合がはいる。このようにバイキングという言葉は、有名であるし、今では「食べ放題形式の料理」という意味で私たちは使っている。しかし、食べ放題のバイキングの元である、バイキング(ヴィーキング)

についてはあまり知られていない。またバイキングについての誤解も非常に多く見受けられる。例えば、バイキングは海賊の一種に過ぎないと早合点されることがある。

私も高専四年生の七月までは、「バイキング＝海賊」という等式を信じていた。バイキングという言葉自体が、海賊の意味であるはずと考えていた。歴史の授業がきっかけで、ギリシャ神話に興味を持ち始める。神話に出てくる神やモンスター、地名が、ゲームや漫画、アニメの名前として登場していることが非常に多かった。これらが好きな私にとって、神話は入り込みやすかった。ギリシャ神話以外の神話も読んでみたいと思い、次に読んだのが「北欧神話(ゲルマン神話)」である。ギリシャ神話や聖書とは違い、殺伐とした印象があった。あまり神話らしくないなと思った。私は北欧神話の虜になり、北欧神話関連の本やウェブサイトを讀んだ。そうしていくうちに、北欧神話の神を信仰して

いた民族は、バイキングであることも知った。最初私は、バイキングは宗教なんてない野蛮な奴らと思っていたが、この神話を読んでバイキングに対する誤解が崩壊した。バイキングについても調べたら、確かに彼らは海賊行為をしていたが、それはほんの一面に過ぎないことが分かった。彼らの活動範囲の広さ、造船技術や航海術の凄さには驚いた。

### 北欧の特徴

8世紀から12世紀にスカンジナビア地方に住んでいた民族をバイキングという。北ヨーロッパではヴィーキング、英語ではバイキングと呼ばれている。バイキングの言葉の由来は、まだはっきりと分かっていない。彼らの故郷である北ヨーロッパは、現在はノルウェー、スウェーデン、デンマークの3つに別れている。北欧はフィヨルドと無数の島々がたくさんある。このような環境

では、船が不可欠である。造船技術が発達したのも、この地形のおかげである。北欧の地理的特徴を列挙すると以下のようなになる。

- 1・オーロラが見える。
- 2・白夜がある。（夏は昼が長くて、冬は夜が長い。）
- 3・寒冷な気候。（作物は育ちにくい。）
- 4・フィヨルドや無数の島々がある。

これらの地理的特徴はバイキングの生活や航海術、歴史に影響したことは言うまでもない。寒冷な気候は、彼らの歴史に影響したようである。肥沃な大地を求めて、大西洋の島々へ侵略の手を伸ばした。彼らの活動は多種にわたるが、その活動範囲の広いことに驚く。例を挙げるとイングランドやアイルランド、ロシア、ローマ付近、グリーンランド、北アメリカなどが彼らの活動

範囲であった。北アメリカは一〇〇一年、レイブ・エリクスソンというバイキングがカナダのニューファウンドランドに上陸した。コロンブスがアメリカを発見する（一四九二年）より、五〇〇年ほど昔の話である。絶対的な統治者を持たなかったのが、バイキングの歴史の特徴である。たしかに北欧三国の基盤になった土地に、それぞれ王はいた。しかしスカンジナビア全部を統一した帝王は現れなかった。

しかし一一世紀はじめ、バイキングの時代は終わりを告げる。ノルウェー王ハラルド・ハルドラーダは、イングランド征服を行ったが失敗した。同年、植民都市であったヘーデビー（現在のドイツ）もポーランドからの部族によって壊滅した。一四世紀頃に至っては、形勢がすっかり逆転される。西欧諸国の経済力や軍事力には、適わなくなった。

## バイキングの生活

バイキングの階層は大きく分けて三つある。領主、族長（上流階級）、農民、職人（中流階級）、奴隷（下層階級）の三つであった。農民や職人は、ボンデ（自由人）とも呼ばれ、武器の所有権や参政権もあった。奴隷も働き次第によっては自由民に昇格する事が出来た。

バイキングの社会では女性の権利がしっかりと確立されていた。主婦は家の中では主役で、家を守っていた。男達は、海に出掛けて中々もどらない事があり、このときに活躍するのが主婦であった。彼女たちは家の中のあらゆる鍵を持っていて、家を守っていた。子供は家の宝であったが、老人の扱いは非常に冷たい。過酷な環境で行き続けることは簡単ではない。人を助けられないようなものは生きる資格はないとされた。真っ先に犠牲になるのは老

人であった。労働源である若者を死なせるよりは、老人が死んだほうがマシだという思想がバイキングにはあったと思う。

バイキングはロングハウスという家屋に住んでいたらしい。いくつかの部屋に分割されていて、中央の広間には炉があった。これが唯一の光源であり、暖房であった。中にはサウナ風呂の原型のような蒸し風呂の部屋もあった。ロングハウスは丸太で構成されていて、屋根は芝土でふいてある。広間の両側には、腰をかけるくらいの高さの段があった。昼間は椅子になり、夜はベッドになった。衣服は羊毛、布団は狼の毛皮を使っていたらしい。

宴会の日になると、その家の主婦は召使いにテーブルを整えさせ、床には麦わらを広げる。ご馳走はビールはもちろんのこと、肉魚ハムソーセージなどが用意された。バイキングの酒杯は角の杯であった。鹿の角がメインであつたらしい。この酒杯は先

端がとがっていて、酒を入れると下に置けなくなる。(重心が偏つてしまうから)注がれた酒は「スコール」という掛け声と共に一気飲みしなければならなかった。つまり逃げという言葉は許されないのである。

バイキングの葬式について話すと、死体といけにえ、副葬品(死んだ人にとって大切な宝物など。剣、首飾りとか。)を船に乗せて、火をつけて海に出した。この方法は、裕福な家系の人が行った方法である。北欧神話でもバルドルが死んだとき、このような方法で葬式を行った。一般人は、船の形を象つた墓に、死体や埋葬品を埋めていた。このような墓を「船墓」と呼ぶ。

船乗りたちが海に出るのは夏の間だけであつた。冬が過ぎ、4月になると略奪遠征成功の儀式を行う。儀式には、彼らの神々に犠牲をささげる習慣があつた。バイキングの神といえは北欧神話

## 航海術

で登場するオーディンやトール、フレイ、フレイヤ、バルドル、ロキなどである。彼らは特にトールを信仰していたらしい。北欧の聖所であるウプサラの神殿には三人の神が祭られていた。中央にトール、両脇にオーディンとフレイが祭られている。バイキングにとって重要な神はトールであることが読み取れる。北欧神話の神々にはそれぞれ神官が任命されていて、彼らの仲介によって犠牲をささげる。その犠牲は、数種類の動物で人間も含まれる。これを九体殺して、神殿近くの樫の木に吊るす。犠牲の血によって、神と交信するのである。非常に野蛮な風習であるが、彼らは自分の神々の物語や詩を尊重している芸術的な一面もあったと思う。北欧神話が今でも生きているのは、彼らの芸術性や信仰が高かったことを表しているのではないか。

船出すると、当分の間船上生活をしなくてはならない。食べ物には干し魚や干し肉、パンなどがメインであった。船が木造であるから火を使うのは言語道断である。しかし、大きな鍋を船に積んでいたらしい。上陸した先でスूपや煮物を作るためである。生きてゆくには欠かせない水は、大きな樽や皮袋に詰めて運んだ。夜になると、船を岸に近づけて停泊する。野宿用のベッドや寝袋を用意して一夜を明かした。船の上は吹きさらしで寒いので、一人で寝るのは体が温まりにくい。皮の寝袋は主に二人用あるいは三人用で、お互いに抱き合って眠ったらしい。

彼らの活動範囲はとても広い。植民者や戦士、商人として当時知られていた世界のほとんど全てに足を運んでいた。カスピ海に向けてロシアに進出したり、ジブラルタル海峡から地中海に出て

イタリア、エジプト、エルサレムまで足を運んだ。内陸の遠征では、中国からやってくる隊商に出会うこともあった。北の海を渡りアイスランドやグリーンランド、北アメリカまで発見した。

これほどの遠路を航海するには、造船技術はもちろんの事、高度な航海術が必要である。はじめは渡り鳥の飛行パターンからを見て、陸地を割り出していた。渡り鳥が海に消えてゆくということは、その先には必ず陸がある。そのうち、渡り鳥ばかり頼るわけにはいかなくなり、北極星を見て現在地を確認した。しかし北欧には、白夜という厄介な現象があり、そのために星を見る事が出来ないときがあった。まして航海は夏に行われるので、北欧ではいつまでたっても日が沈まなかった。そこで彼らは、太陽の高度を頼りにして航海した。「ハーフホイール」という測定器具を使って、太陽の高度を測定した。船長や船員が、星や太陽の事を良く知っていたわけではなく、ケントマントと呼ばれる天文や測

定に精通しているパートナーが同乗していたらしい。

バイキングの船（バイキング・シップ）は大きく分けて二通りの形があった。ひとつは「ロングシップ」で、もうひとつは「クナル」であった。ロングシップは船の底が浅く作られていたので、水深が浅いところでも入り込みやすく、これにより襲撃や退却が迅速に出来た。（ロングシップは喫水が小さく、浅瀬の侵入を可能にした。）長期の航海のために建造されたものではなかった。クナルは、ロングシップとは対称的で容積が大きく、貿易や長旅に使われた。両者とも甲板はなく、舷側は二枚張りになっていた。大きい帆と人力による力で動かしていた。バイキング・シップは木造なので出土品はかなり少ない。例を挙げると、下のようなものがある。

1・チューネ・シップ（一八六七）

## 2・ゴックスタッド・シップ(一八八〇)

## 3・オーセベリー・シップ(一九〇四)

ロングシップは急襲するには絶好の船であった。敵地を襲撃するには船を浜に乗り上げなくてはならない。ロングシップは船底が浅く作られていたため、これが可能であった。攻撃および退却するための、スタートダッシュも非常に速い。戦士たちは人を殺し、金品を奪い捕虜を作った。西ヨーロッパ諸国やアイルランドに侵入して、そこで住民を奴隷にして定住した。定住先は軍事基地にもなった。中でも最も恐れられた戦士はバーサーカー(狂戦士、ベルセルク)であった。古代ノルド語で「熊のシャツ」という意味である。ベニテングタケを常食していたらしく、いつも幻覚を見ていたという。幻覚によって、何も恐れないようになるらしい。(ただしベニテングタケを常食していたという考えは、

後世の人の思い込みや誇張である可能性もある。)

## バイキングの活動地域

バイキングは西ヨーロッパではノルマン、つまり北方人と呼ばれていた。スカンジナビア三国を本拠にして、各地で略奪、侵略交易、植民を試みた。航海ルートは大きく分けて四つある。

1・北方ルート：ノルウェーからシエトランド諸島に向かい、フェロエ諸島を経て、その後アイスランド、グリーンランド、北アメリカまで行った。

2・西方ルート：シエトランド諸島から、西南に曲がり西方諸島を経て、アイルランド東沿いに南下した。

3・南方ルート：デンマークから、ノルマンディー半島、フランス西岸、イベリア半島を迂回して、ジブラルタル海峡を超えて地

中海南岸に向かい、シチリア島、北アメリカの海岸に一時的に移住したもの。また、イングランドに定住したものもこのグループに入る。

4. 東方ルート：バルト海を横断して、フィンランド海岸やロシアに入る。そのあと、ラドガで二手に分かれた。一方はカスピ海を経て、ベルシャ地方やカフカズ地方に達した。もう一方は、キエフ公国を建設し、コンスタンティノープルを経て、シチリア島にも赴いたらしい。

以上四つのルートを合わせると、アレキサンダー帝国、サラセン文化圏、モンゴル帝国などの範囲を超えるものがある。その期間は八世紀から一一世紀はじめてにかけてである。こんなに広い範囲で活動しているのだから、世界史はともかくヨーロッパ史から、バイキングの活動を完全無視するのであれば、それはあまり

にも大きな損失である。バイキングの活動は西洋史、中世史に興味のある者、ヨーロッパの成立を議論する者にとって、見逃すことはできないはずである。バイキング＝海賊と簡単に扱つのは、あまりにもお粗末ではないか。

### バイキングの神話

北欧神話を読むと、彼らの文化や思想、生活環境が間接的に分かる。バイキングの歴史や習慣、宗教はすべて口頭で伝えられた。北欧人やアイスランド人はバイキングの時代が終わっても、先祖たちの武勇伝や民話、神話を子供に伝えた。それらの神話や伝説、武勇伝をアリ・ソルギリスソン（一〇六七—一四八）がまとめ

た。それはサガ(saga)と呼ばれた。

サガと並んで名高いのはエッタである。スノリ(一七七八―二四二)が著したものである。現在、北欧神話というこの「スノリのエッタ」を指すことが多い。このエッタは二二三三年に完成したらしい。しかし、この時代はキリスト教が広まっていたので、エッタは信憑性や正確性には欠けるといった面もある。キリスト教的思想が入り込んでいる可能性もある。実際、北欧神話を紐解いてもそのような兆候がいくつか見られる。しかし、これらの書物はバイキングの精神がたくさん詰まっているので、大いに参考になるし、また重要な資料でもある。北欧神話を読む時やバイキングの歴史を観察するとき、「キリスト教」は重要な言葉になる。発掘品は貴重な情報を与えるが、その数は非常に少ない。バイキング船は木造であるし、ルーン文字も木や石で彫られるためのものではなかった。

## 今でも生きているバイキング

最後に現在ではどのように北欧神話やバイキングの歴史が残っているかを書く。例えば、英語の火曜日、木曜日までは北洋神話の神にちなんだものである。七個中四個が北欧神話に参与している。

火曜日 Tuesday = Tyr's day チュールの日

水曜日 Wednesday = Wodan's day ウォーダンの日

木曜日 Thursday = Thor's day トールの日

金曜日 Friday = Frigg's day フレイヤの日

キリスト教の代名詞のひとつであるクリスマス。クリスマスに使われる、クリスマスツリーは、一九世紀にドイツから移入されたものであるが、その期限をたどると北欧神話時代まで行く。前述したとおり、バイキングの儀式では、樅の木にいけにえを吊る

す習慣があった。樫の木はオーディンの聖木であった。クリスマスツリーの飾り物は、人間や動物（いけにえの対象物）の名残であるらしい。

ルーン文字を使った占いもある。ルーン占いの創始者はラルフ・プレムであり、占いでは全部で二五種類の文字を用いる。その文字の中で、寒さを連想させる意味を持った文字が二種類あり、Is（意味：氷）とEisw（意味：ひょう）の二つである。北欧の厳しい気候であることが分かる一面でもある。（ただしルーン文字の意味は、推測にすぎないことに注意。）ルーン文字はアクセサリーとしても人気があるが、一般にはあまり知られていないのが現状である。ゲームでもよくルーンという言葉が使われていて、特にファイナルファンタジーでは、「ルーンナイト」「ルーンの腕輪」など、北欧神話ネタが満載である。神話や占いなどを考えながら、ゲームをプレイしてみるのも、違った視点で神話やゲーム

を見ることができ、面白いかもしれない。「ヴァルキリープロファイル」のように、北欧神話を基にしているゲームもあるし、「大航海時代」のようにバイキングの生活を基にしているゲームもある。

世界に特にヨーロッパに多大な影響を与え、現在でもいろいろな形で残っているバイキングの歴史や習慣。バイキングを単に海賊と片付けてはならないと思う。繰り返し言う。バイキングは単なる海賊ではない、それは彼らの一面に過ぎない。バイキングは人類の貴重な遺産のひとつと数えなくてはならぬ。

北欧神話とサガの世界への招待

## 岡沢 秋

たとえば、こんなふうに。

初めて開いた本のタイトルと匂いを覚えてる。

それは「エッタとサガ 古典北欧への案内」(新潮選書、谷口幸男)で、古本屋においてあったのを適当にタイトルだけで選んで買ったものだ。長年古本屋に積み上げられていたと思しきほこりっぽさと、茶色く日焼けしたビニールシートが、それ自体を古書に思わせた。

北欧神話と言うとゲームやマンガにもよく使われ、出てくる名称は広く知られているものの、その名称の元になっている道具が異なる場面で登場するのか、神々はどのようなことをしてきたのか、実際に読んで確かめてみた人は多くは無いと思う。はっきり言えば原典は短く、そして難解だ。それらは主に口伝として、言葉にしたときに耳に快いように、端的であり繰り返しもあり、極限まで説明を省き、説明を一切つけずに、当時の聞き手が知っているとされた古事や固有名詞を次々と並べ立てていく。日本の初心者には、意味はわかりづらいかもしれない。

でも、細かいことは気にする必要が無い。とりあえず読んでみればいい。分からないなりに、不思議に力強いリズムが伝わってくるはずだ。

巫女の予言より抜粋

私は覚えている、はるかなる時の  
はじめに生まれし巨人たちを、  
そのむかし私を  
はぐくみ育てし者たちを。

私は覚えている、九つの世界を  
九つの根の枝を、  
土の中にありし  
名高き測り樹を。(第二節)

月のみちづれ

太陽が南から

天のへりの上に

右の手を投げ置いた。

太陽は知らなかった

おのれがいずこに館をもつのか、

月は知らなかった、

おのれがいかなる力を持つものか。(第五節)

彼女はただひとり外に座していた。

老人、アースらのなかで不安を覚えつつ

思慮する者がやって来て

目を覗き込みとき。

そなたらは私になにを問うのか？

そなたらは私をなにゆえ試みるのか？

私は、オージンよ、すべてを知っている、

そなたがどこに目を隠したかを、

かの名だかき

ミーミルの泉に。

ミーミルは朝ごとに

ヴァルフオズルの担保から

蜂蜜酒を飲む。

そなたらは何ぞ存知か

それともいかに？(第二十節)

出典「巫女の予言 エッダ詩校訂本」

シーグルズル・ノルダル(東海大学出版会)

これは、北欧神話の最も重要な原典「エッダ」の中に出てくる、「巫女の予言」という詩の一部分である。

詩のセリフを語る巫女が誰なのか、詩の中に投じようとする用語が何を指すのかは、興味を持ったなら調べてみればよい。ただ今は、その言葉の響きと独特の余韻を楽しめばいい。

巫女は神々と人に語る。「そなたらは知っているか、覚えているか。」だが覚えている者はそうはいない。彼女が語るのは、遠い遠い時代、世界が始まった頃から今に至る物語。そして、神々が滅び去り、世界が消え去り、再生するだろうという、未来にして過去の物語なのである。



## サガにおける女性の法的権利について

山森 衛

北欧神話と言えば、一般にどのような印象を持たれるのだろう。ワグナーのオペラや「指輪物語」の源泉、昨今ならばゲームやファンタジー小説の素材だろうか。

いずれにせよ、猛々しい男達のどよもしと剣戟が響きわたる、勇壮で極めて男性的な世界であるようにとらえられているものと推測する。

だが、そこには確実に女性達も存在するのだ。

いつの世も女性にとつて(男性にとつてもそうであろうが)人生で重要な位置を占める結婚における自主的な決定権の描かれ方をとおして、北欧神話・サガにおける女性像をみてみたい。

女性を描いているサガとして題が挙げられるのは、「ラックサー谷の人々のサガ」である。成立が十三世紀と遅く、歴史資料としての価値に乏しいとされるが、丹念な登場人物の性格描写から、サガに馴染みのない者にも読みやすいとされる、「小説」としての色彩豊かなサガである。サガの常として数世代にわたって続く物語であるが、主にグズルーンの四度にわたる結婚と、彼女に関わる男達をめぐっての物語である。必然的に相続や結婚にまつわる法的な描写も多い。例

証としてあつかうにはまずまずだろう。

### 初婚の場合

グズルーンの親の世代であるホスクルドがヨールンという女性に結婚を申し込む時の手順である。だいたいの例において見られるが、まず女性の父親に、男性の父親もしくは親族が話をもちかける。そして、この事例の場合こう言われている。

「決定は娘の意志にまかせろ」

また、そのひとつ下の世代孔雀のオーラーヴとソルゲルズの結婚においても、

「娘の同意がないことには誰もソルゲルズを娶ることはできないから」

という台詞がある。さらにグズルーンの息子ボリとソールデイスの結婚時には、

「ただすべてはソールデイスがどう思うかにかかっているわけだ」

と言われている。一応本人の意思確認はされていたようだ。

ただし、ヨールンは

「父に決めてもらう。父がいいと言ったらそのとおりにする」と言っている。父親もしくは保護者の意見を尊重することが望ましいとされていたらしい。ボリとソールデイスの件に

おいても、まずソールディースの父に話が持ち込まれている。また、ソルゲルズの結婚を親達が相談している時、

「ミュールの人々と親戚になることでお前の勢力も増す」という台詞がある。このサガで大きな役割を果たすキャラクターとフレブナの結婚においても

「父親は評判がよく、立派な家柄、財力もある。姉妹は有力者と結婚している」との言葉が見られる。

一応本人の意思確認は行われたが、親族の了解が大前提であり、また何よりも結婚が血族同士の繋がりとするとらえられていたようだ。

#### 再婚の場合

アイスランド社会において、男性の場合社会の構成員として一人前であるとみなされる条件に「結婚して独立している」ということがあった。では女性の場合、「結婚経験はあるが夫が死亡している」未亡人はどう見なされていたのか。

グズルーンの二番目の夫であるボリがグズルーンに求婚した時は、やはり彼女の一族の男性にまず話をもちかけている。だがその男性の答えは、

「グズルーンは未亡人だ。自分のことは自分自身で決めるだろっ」

このものだった。また四度目の結婚であるソルケル・エイヨールヴソンとの時には、

「誰をさしおいても息子のソルレイクとボリに決めてもらっ」とグズルーン自身が言い、それをうけて息子は「母が一番よく判断できる」と答えている。

一応本人の意思確認がなされるのは初婚の場合と同様だが、結婚経験者はそれなりの能力・地位があるように受け取れる言葉である。

だが、サガの最初に登場する女傑ウンの孫、ソルゲルズは「親戚の者達の同意を得て」

再婚している。また、この時息子ホスクルドの許可は得ておらず、この故にこの再婚で生まれた息子に相続権はないという騒動が後で起こる。もっとも、この場合ゲルマンの法において最も大切である「証人」の欠如が問題であり、女性の権利の問題でないという解釈も可能ではある。

ともあれ、結婚経験の有無で多少周囲の扱いは違うものの、法的な立場としては変わらず親族男性の法的支配下にあるといえるだろう。

#### 離婚の場合

「結婚は情熱、離婚は経済」と言われるように、結婚より

もなおエネルギーと手間を必要とするのが（少なくとも現代日本では）離婚である。サガの世界において、離婚の際の女性の立場はどのようなものだったのか。

首長であるソールズは、妻ヴィーグデイスがかくまった、殺人犯である妻の親戚をかばわなかったということが原因で妻に離婚を宣言されて出て行かれる。だが彼は離婚を承伏しなかった。しばらくの後、ヴィーグデイスがソールズの持つ財産の半分について要求しようとしているという噂が流れ、ソールズはこれについて思い悩み、有力者であるホスクルドに相談すると、

「法的にソールズへの請求は出来ない。罪のある男をかばわなかったことは、男らしくない行動ではないから」という返事を得た。

女性の方から離婚を宣言することは可能であったようだ。ただし厳密に言えば夫の許可は必要だったようだが。また、離婚の原因として男らしくない、すなわちジェンダーが問題とされ、個人的な感情などは認められていない。離婚原因としてジェンダーの不徹底が挙げられることは、同サガの他の事例でもみられる。

このソールズの養子、オーラーヴの娘スリーズ（このように系図が重要視され、延々と語られるのもまたサガの特徴である）は三年間の結婚生活のあと、夫ゲイルムンドから別れ

て暮らしたいと言われ、その際財産は残されなかった。離婚したいにちては格別にオーラーヴから咎め立てはない。男の側からの一方的な離婚は可能だったということだろうか。ただし、この後スリーズが

「よくも人でなしのように扱いましたね」

と怒り、財産の譲渡がなかったことへの復讐として、ゲイルムンドの所有する名剣を盗んでも罪に問われてはいない。それどころか後の段落で、

「頭のいい誇り高い、すぐれた女」

と言われている。男性からの一方的な離婚の場合、可能ではあるが財産の譲渡がないことは恥ずべきことと思われると解釈出来る（この剣の盗難エピソードは、物語の構成上作者が入れたもののような印象もないとはいえないのだが）。

総じて、この「ラックサー谷のサガ」から見る限りにおいては、結婚や離婚に関わる法的な制度において、女性にはかなりの制限をうけていたといえる。

だが、同じサガで賢女と言われるウンが一族を率い、二人の男の対立が女性の意見によって収まっている。また一方的な離婚の場合でも財産の請求はとりあえず可能であった。他のサガでも、女性が男性を鼓舞したり助言したりする描写は見られる。「ヴォルスンガサガ」のシグニユーやグズルーン、

ブリュンヒルドの存在感はいうまでもないだろう。

エツダやサガにおいて、法的にはどうあれ、実質的に誇り高く激しく描写される女性達もまた、男達と同様に勇ましく、ゆえに幾百年の時を経ても人々を引きつけてやまない。

引用部分はすべて

「アイスランド サガ」(新潮社)による

いまどきのヴァルキューレ

ヘルギ　みのまた

ご存じの方も多いかもしれませんが、ここ数年北欧神話が脚光を浴びています。とはいいいましても、北欧神話に登場するヴァルキューレが中心であり、おかしなことにそのついでに本来の主神・オーディンや、フレイヤ達がぶら下がっているような状態であるという話です。一体、どのような分野で脚光を浴びているのでしょうか？

それは、ゲームやアニメといった分野です。オーディンの娘であるヴァルキューレをヒロインにすること自体は、二十年前ぐらいからあったわけですが、ここ数年に登場したいわゆる「ヴァルキューレをモチーフにしたヒロイン」は、少し事情が異なるようです。さて、どういったヴァルキューレ達がアニメやゲームに登場し、どのようにして北欧神話がより多くの人々に知られるようになったのでしょうか。今回は、一九九九年に初登場し北欧神話サイトを震撼させ、最新新たに続編が発売された『ヴァルキリープロファイル』をご紹介します。

フレイヤはヴァルキューレであるレナス・ヴァルキューリアとなり、北欧神話同様世界の終末ラグナロクから天界

アスガルドを守るべく、人間界から勇者の魂を選定し天界へ送り込まなければなりません。その中で、勇者の魂であるエインヘルヤルとの出会いなどを通じて、封印されているレナスの記憶が少しずつ取り戻していくというものです。

さて、このゲームが「北欧神話サイトを震撼させた」とは、どういうことでしょうか。それは、北欧神話を知るものにとっては大胆な設定にあります。まずはオーブニングのあとにいきなり登場する、高飛車な性格のフレイです。男神で高飛車とはかなり珍しい設定だとお考えのことと思いますが、実は女神として登場しています。高飛車といえばフレイヤにびつたりではないかと思うのですが、一応彼女もこのゲームに登場しています、びつちびちの幼女の姿をして。そして極めつけは、我らが主神のオーディンです。パジャマっぽい姿もさることながら、隻眼ではなく両眼でのお出ましです。ナイスミドルで若かれし頃のオーディンなのかと思いますが、つばの広い帽子すらかぶることなく、ゲームのキャラクターとしてはよいデザインですが、一見してどこの神様か分からないというのも、北欧神話を知る私たちからしますと面白味が無いですね。

舞台設定もなかなか奇抜です。アース神族に敵対する巨

人々が『ヴァン神族』とされ、先述のフレイヤやフレイヤはアース神族とされています。アース神族に対するヴァン神族というのは、北欧神話では前の歴史として書かれるか、戦神アース神族に対する豊饒神ヴァン神族として書かれる程度であり、ラグナロクまで敵対する存在として書かれるあたりは、ゲームのプレイヤーにわかりやすさを提供するためではないかと考えています。

それでは、アース神族の一員の口はこのゲームではどのように書かれているのでしょうか。北欧神話では知恵を提供してアスガルドの神々を手助けするものの口が災いして縛り上げられ、ラグナロクでは敵対することになります。が、実のところゲーム上の彼(?)も最初はアース神族の一員として登場しますが、後に敵対する立場に変わります。そのため、北欧神話とは全く別のゲームとは言い切れない一面を作ることになります。

さて、話は脱線してしまいましたが、本題であるこのゲームに登場するヴァルキューレ、レナス・ヴァルキュリアはどのように描かれているでしょうか。エツダではインヘルヤルに給仕をしているか、戦場に出かけて戦死者の魂を探すといった場面が書かれています。レナス・ヴァルキュリアの場合は戦死者の魂を探す時は対話まで盛り込

まれ強調されているのに対し、給仕をすることはないようです。さらに、インヘルヤルとともに戦う場面が非常に多いのも特徴です。これは、元々プレイヤーが何らかの操作をして戦闘を行うゲームが多い中、給仕の操作という新しい分野を作るよりも、慣習的な戦闘をさせるゲームのほうがヒットを狙うクリエイターとしてのリスクも少なく、また、数多くのゲーム愛好者に受け入れられやすいという理由があるのではと考えています。

いずれにせよこのゲームでは、現代の社会通念を取り入れた中世西洋風の世界観としている慣習的なゲームに対し、古代北欧における社会通念を少し取り入れて新しい世界観を提供しつつも、ヴァルキューレの「戦乙女」という要素を前面に押し出して戦闘場面を多く取り入れ、操作体系は慣習的なゲームとして仕上げていくように思えます。言い換えれば、慣習的なゲームの世界観を打破するために北欧神話の世界が取り込まれ、今はやりのヴァルキューレを中心に据えたものの、ゲームとしては慣習的なゲームと何ら代わり映えしないということなのです。

しかしながら、そもそもゲームにおいては北欧神話の神・人物・道具・通念といったものが単体で借用されてしまうことがほとんどであり、北欧神話の世界観が伝わること

はほとんどありませんでした。しかし、『ヴァルキリープロファイル』においては、設定そのものが北欧神話をベースとしているため、それらはある程度まとまって借用され、その結果互いがリンクすることにより、北欧神話の世界観を曲がりなりにも伝えることが可能になり、より多くの人々が興味を持ったことは、このゲームの発売後インターネットのウェブ上で雨後のたけのこのように登場した新興の北欧神話サイトが物語っています。

そしてこのゲームは、北欧神話を愛好する私たちにとっても、妙に北欧神話の世界観に近づいたために興味の対象となり、実際にプレイして特有の設定を理解してからエツダやサガとの相違点を洗い出し、重箱の隅をつつくような指摘をするという楽しみを提供してくれたと考え、またこのような『妙に北欧神話の世界観に近づいた』、新しいゲームの登場を願わずにはいられないことと思います。

---

サガエッタ協会について

とりあえず副代表 岡沢 秋

サガヤエッタの世界を

ウェブを通して広め、仲間をつつること

ウェブ環境をお持ちの方は、ちょっとググっていただきたい。

「[Sagadda Association](http://Sagadda Association)」もしくは「サガエッタ協会」で、[www.saga-etta.jp](http://www.saga-etta.jp) としつつウェブページにたどり着いたら、そこが目的地です。

我々の本拠地、つまりスキモノの集まる坩堝(るつぽ)とでも言うべき場所。「協会」なんてカッコよく名前をつけてはいるものの、実際のところは同好会。会費も資格も一切ご無用。入会には秘儀も刀礼もございませぬ。

こちら発足は二〇〇六年となっておりますが、活動自体は別名にて、というより自然発生的な人の集まりとして何年も行つてまいりました。最初のオフ会はなんと一九九九年！ 当時はSNSだのミクシィだの出会い系だのは無く、ダイヤルアップモデム片手に少ないネット人口の中で、同じ趣味の人を見つけてはオフ会をしていたものなのです。

さて、この協会。いちばんの目的は

これでございます。

なまじ知名度が高いぶん、ゲーム等の設定がそのまま記憶されて誤解を生むなど意外と実際のところは知られていないのが、北欧神話とサガの世界。本来の持ち味の良さがなかなか人に伝わらない部分が多いのですが、そうした不遇に甘んじることなく、わが道をマイペースに突き進む人々が、この協会には多数いらっしゃいます。

現在の主要な活動は、こつして本を作ったり、企画をたててウェブ上で応募を募ったり、もちまわりのブログを更新したり…といったもの。また定期的に勉強(会と称したオフ会も執り行つております。知識はなくてよし。若干の興味があればよし。北欧神話、ヴァイキング文化、サガなどに興味をお持ちの方は、是非いらしてくださいませ。会員一同、心よりお待ち申し上げます。

## Saga & Edda Association

### Saga & Edda Association について

国際的な詩学・文学研究の中心地として活動する、研究・交流の場として、Saga & Edda Association (SAGA) を設立しました。SAGA は、北欧の詩学・文学研究の中心地として活動する、研究・交流の場として、Saga & Edda Association (SAGA) を設立しました。

●SAGA は、国際的な詩学・文学研究の中心地として活動する、研究・交流の場として、Saga & Edda Association (SAGA) を設立しました。



### ●SAGA

●SAGA は、国際的な詩学・文学研究の中心地として活動する、研究・交流の場として、Saga & Edda Association (SAGA) を設立しました。

●SAGA は、国際的な詩学・文学研究の中心地として活動する、研究・交流の場として、Saga & Edda Association (SAGA) を設立しました。

- SAGA は、国際的な詩学・文学研究の中心地として活動する、研究・交流の場として、Saga & Edda Association (SAGA) を設立しました。
- SAGA は、国際的な詩学・文学研究の中心地として活動する、研究・交流の場として、Saga & Edda Association (SAGA) を設立しました。

●SAGA は、国際的な詩学・文学研究の中心地として活動する、研究・交流の場として、Saga & Edda Association (SAGA) を設立しました。

Saga&Edda Association

<http://www.saga-edda.jp/>

北欧神話とサガの世界への招待

2006.10.1

サガエッタ協会 発行

<http://saga-edda.jp>

mail: <http://saga-edda.jp/info/postmail.html>

ご  
覧  
い  
た  
だ  
き  
あ  
り  
が  
と  
う  
ご  
ざ  
い  
ま  
し  
た  
。  
サ  
ガ  
エ  
ッ  
ダ  
協  
会  
会  
員  
一  
同